LOWELL'S
POETICAL
WORKS
HOUGHTON MIFFLIN
AND COMPANY
ある日の
ライン川のほとりで
KIMI ORR（旧姓 金村 紀美子）

# まえがき

著者近影

Wiesbaden, Biebrich に三年半住んでいる間、私はライン川のほとりで、数えきれないほどの出会いがあり、語りがありました。

ライン川はただ、美しい風景をしているだけでなく、人々の心を和ませてくれるところであり、また素晴らしい出会いの始まるところでもある。だからいつもいろいろな人が集まる。人が集まるから“ライン川は素晴らしい”ともいえるし、ライン川が素晴らしいから人が集まるともいえる。

そこでの私の数知れない出会いの一つ、楽しい、又忘れられない思い出を語ってみたく思った。

（編者注：2015年3月～2018年9月/在住）

## Wiesbaden

ヴィースバーデン (Wiesbaden) は、ドイツ連邦共和国ヘッセン州の州都である。15の温泉源および鉱泉源を有しており、ヨーロッパで最も古い温泉地の一つである。

（※ウィキペディアより引用）

写真出典先：https://en.wikipedia.org/wiki/Wiesbaden#/media/File:Wiesbaden_Montage.jpg

# “シカモアの木”の下で

今日はジョンがアメリカに一週間の出張に行く日である。７時にビーズバーデンの駅まで送り、その帰り道、日曜日で早朝のせいか、車もなく、それじゃ、ということでちょっと遠回りして帰ろうと思った。

もう一つの理由はドイツに来て以来、車を運転する機会もあまりない。路面バスが便利でどこにでも行ける。それでひょっとして車を運転する感覚を失ってしまってはいけないと思っていたからである。人気のない、車もあまり見かけない広い道路をすいすいと運転できるのは至極当然であったので、しばらくそういうところを運転している自分に退屈し、慌てて家に戻ることにした。いつものようにイーメールをチェックし、ドイツ語の予習、復習、ピアノの練習、瞬く間に時間が過ぎていく。

気が付いたら夕方の５時であった。なんとなく、気分が気だるくなって、ライン川のほとりにでも行ってみようと出かけた。いつもならジョンが“ちょっと行こか”って、連れ出してくれるのに。今日はそういう人もいない。

何となく肌寒く感じたので、ジャケットを着て出た。７月の半ば過ぎなのに、この肌寒さはドイツならではのこと。でもジャケットを着てきたおかげで、冷たい風も心地よく感じた。

ライン川のほとりは日曜ということでかなりの人はいたが、この肌寒い気候のためか、いつものようには賑わっていなかった。でもアイスクリーム屋の前やワインスタンドのあたりは人がいっぱい。

## Sycamore

### 珍しい樹形が特徴
### 「シカモアの木」

人が空に向かった両腕を伸ばし
力強くガッツポーズをしている
姿を想像するんです。
夏は大きな葉をいっぱいつけて、
行きかう人々に心地よい日陰を
与えてくれます。

そこここに家族づれもいた。アイスクリームを食べながら、またワインを飲みながら、ライン川を行く国際色豊かな貨物船や遊覧船を眺めながら楽しんでいるようだった。そんな人たちを眺めながらゆっくりと歩いていくと、「海とオゾンのサイエンスの展示会場」になっている、船がすぐ前のハーバーに停泊していた。昨日も行ったんだけど、今日も時間つぶしに行ってみようと入っていった。

何とそこは大変な人だかり、そこもここも展示物に人がいっぱい。子供たちも大変興味深く観察しているようだった。

私はサイエンスなんかにあまり興味はないんだけど、海水の生き物や産物に大変興味を持っている。

ちょうど私が立っている傍のビデオが始まる２分前だった。そのあたりもあまり広くはなかったが、１０人位座れるような椅子が置いてあった。そこが私の居場所のような気がした。その椅子の周りは私一人だった。でも始まる寸前には立っている人もかなり見受けられた。

海底を観察したビデオであった。クジラやサメのような大きなのは、かなり“われは大将”のごとく泳いでいる。でも小さな魚は群れとなって、大きな魚に対処しているように見える。“あんたなんかこわくないよ！”って、時には威嚇さえも感じる。魚にとって海は天国のようなもの。何の区切りもなく、行きたいところにどこにでも行けるようで、彼らにとって海の広さは素晴らしい！

またあの色とりどりの海底はわれわれ人間にとっても魅力がある。

ライン川のワインスタンド。
私の横に座っている人は近所の人でケニヤ出身。ドイツ人と結婚し離婚。娘さんがノースキャロライナ居住。

そのあと、昨日と同じようにぐるりと見て回ったが、日曜日ということであろうか大変な人込みであった。人もひっきりなしにこの展示会場に入ってくる様相である。展示会場の外に出てみると、入り口のところは大変な列であった。私が来たときは待たずにそのまま入れたのに、、、

その展示会場を出て、また川のほとりを歩きだした。人混みが増えてきたようで、でも私の歩いている方向には人影がまばらであった。見るといつもなら通り越せるところがブロックされていた。“じゃ、仕方がないや”と、今来た道を引き返すことに決めた。ワインスタンドのあたりは相変わらず混んでいた。

ドイツの人たちはワインを飲んで楽しむことを知っている。夏場はあちこちの街でワイン祭りが行われる。歌あり、ミュウジックあり、その周りでダンスがある。ドイツの町はどこに行っても楽しい！

そこからもう少しあるいていくと、見慣れた二人の若い男性がビールを片手にライン川の灯台のそばに立っていた。“ああ、キャッスルのレストランのウエイターだ”と、すぐわかった。私は彼らに近づいていった。

写真出典先：https://wiesbaden-lebt.de/klein-versailles-im-herzen-von-wiesbaden-biebrich

**ドイツ有数の温泉保養地「ヴィースバーデン」にある「ビーブリッヒ城」**

1700年から1750年にかけてライン川の川岸に建てられたバロック様式の城。3つの翼を有する建物は選帝侯と後のナッサウ公達の居住として使用されてきました。円形の広間やギャラリーはヘッセン州首相の為のリプレゼンテーションが行われており、イベントやプライベートの祝いごとの会場にもなっています。

# 再会しなかった父と子

**「あれ、あんたたちここで何をしているの？　仕事は？　終わったの？」**
矢継ぎ早に質問している自分に気が付いた。私もちょっと“照れ”があったのかもしれない。
**「これから飯を食いにいくところです」**　その一人が言った。
**「じゃ、あのレストランで食べればいいじゃない」**
**「大きい声で言えないが、あのレストランはあまりおいしくない！」**
って、同じ彼がいった。
**「ちょっと聞きたいんだけど、どちらの人がベトナムから来たひと？二人とも丸坊主だから区別がつかなくて」**　と私が訪ねた。
一人が黒人で、もう一人は東洋人なのに何で区別がつかないのだろう…でもよく似ている。二人とも浅黒いスキンカラーをしている。
**「僕たちいとこ同士なんだよ」**　と若い方が言った。
**「ええっほんと？」**
**「いいえ、嘘です」**　笑いながらいった。
**「彼がベトナム出身です」**　私たちより少し離れて、タバコを吸っている同僚を顎で示した。
**「じゃ、あなたはどこから来たの？」**　とその若者に聞いた。
**「僕の父はアメリカ人なんです。母はフランス人です」**、、、
彼はそういう環境に生まれた自分を誇らしく思っているようだった。

ビーブリッヒ城内レストラン

写真出典先：https://www.google.com/maps

**「じゃあなたはこんなところで何をしているの?」**
私自身とても不思議に思った。アメリカからわざわざドイツまで来て、なんでウエイターをやっているのかと。
彼は続けた。
**「僕はビーズバーデン生まれなんです。生まれた時から父はいないんです。僕の父はアメリカのソールジャー《軍人》なんです。僕が生まれる前にアメリカに帰ったんです。母は１８歳でフランスからここに来たんです」**
**「じゃあ、あなたはあなたのお父さんに会ったことがないの？」**
**「ありません」**
**「会いたいと思わない？　探したり、尋ねに行ったりしなかった？」**
**「僕はアメリカに行ったんだけど、父を探さなかった」**
**「あなたのお父さん、あなたを見ると誇らしく思うでしょうね。こんなに立派で、ハンサムな息子がいると知ると」**
彼はなかなかの好青年である。
**「今何歳？」**
**「２１歳　、もし父に会えば言ってやるよ！　僕を育ててくれた母に２０年間の養育費を払えって」**

　彼は冗談を交えて言っていたけど、、、かなり本音でもあるようだ。またその父親のことを“バカ”だとも言っていた。
　彼が生まれてすぐ母と彼を置き去りにした父、また父親に全くかまってもらえることなく育てられた孤独と、怒りをその言葉に投げかけたように思う。彼は父親の名前も知っているし、住んでいるところも知っていると言う。いや、彼はアメリカに行き、また、父が住んでいるサウスキャロライナにも行ってきたという。
でも彼は父親には会わなかったらしい。
　“一日千秋”の想いで一目父親に会いたさに、はるばるアメリカに行ったはず… その願いも叶えずドイツに戻ってきた彼の心中を察するとき、彼に投げかける良い言葉がなかなか出てこなかった…

ライン川の夕暮れ